

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.372

2017

1

隔月刊



実習に取り組む薬学生（大阪薬科大学）

特集 東日本大震災を契機に ——被災地と大学との連携再考——

座談会 大学におけるスポーツ系学生へのケアやサポート

小特集 大学職員 社会人採用のいま

明日への試み 宮城学院女子大学

わが大学史の一場面 聖心女子大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 明治学院大学／追手門学院大学／昭和女子大学

クローズアップ・インタビュー トライアスリート・流通経済大学職員 田山寛豪さん

日本私立大学連盟

Thesaurus Universitatis



神田錦町に開業当初の学習院校舎と正門



現在の学習院戸山キャンパス正門





大阪薬科大学

Osaka University of Pharmaceutical Sciences

創立110年を超える 歴史と伝統



明治41年頃の南久太郎町校舎



現在のキャンパス

かつて薬の町と呼ばれた大阪道修町は、薬業のみならず、薬学教育発祥の地として広く知られています。大阪薬科大学は、1904（明治37）年にこの地に創設された大阪道修薬学校を前身とする、110年を超える歴史と伝統のある大学です。卒業生の多くは薬剤師として活躍し、また、薬業関連企業をはじめ各種企業や行政機関にも優秀な人材を輩出しており、幅広い信頼を得ています。



社会に貢献できる、 薬の専門家を育成



薬を通じて社会に貢献する——これが薬学を志す者の使命です。大阪薬科大学には、講義と実習を通じて、薬学の基礎を学んだ上で、さらに進路に応じた高い専門知識の修得に専念できる教育環境が整っています。

医療の担い手にふさわしい倫理性と社会性を身に付けるためのヒューマニズム教育、および薬剤師として必要な知識・技能や態度を修得するための病院と薬局における参加型実務実習を行うとともに、問題発見・解決能力を育成するために研究室に所属し卒業研究を行います。

きめ細かなキャリアサポートと 卓越した就職実績



入学時からキャリアガイダンスを行うことにより、早期から就職を意識。個人面談や面接トレーニング、各種対策講座、インターンシップ制度といったサポート体制も整っており、学生一人一人の将来設計に合わせた就職の実現をバックアップしています。

卒業生は、薬業関連企業、病院や薬局、官公庁、大学などの教育研究機関といった幅広いフィールドで活躍しています。

次世代を担う 良質な医療人の養成を目指して

平成28年4月、学校法人大阪医科薬科大学が発足

学校法人大阪医科大学と学校法人大阪薬科大学は、我が国の人口構造と社会情勢の変化を見据え、次世代を担う良質な医療人の養成、並びに医学・薬学・看護学が連携・融和する先進的医療体制の構築・提供を目指し、特色ある学際的教育・研究とチーム医療教育を推進するとともに、魅力ある学校作りを行い、併せて新法人大阪医科薬科大学の運営と経営の基盤を強化することを目的として法人合併しました。

また、本法人合併によって、両法人の設置する各学校における教育・研究の高質化と、それらに必要な環境整備の推進を図りつつ、優秀な学生・生徒を継続的に確保し、それにより持続性・公共性を担保するとともに、教育・研究と医療を中心とする Center of Community とし、本邦有数の医療系総合大学・中等学園への発展を目指します。



大阪薬科大学
Osaka University of Pharmaceutical Sciences

大学時報

No.372

2017.1



学校法人大阪医科薬科大学の 一員として

政田 幹夫 ● 大阪薬科大学学長

大阪薬科大学は1904年に大阪道修薬学校として生まれ、以来、2万人を超える卒業生を薬学人として世に送り出し、彼らは薬学関連分野で幅広く活躍しています。医療・薬物治療・生命科学分野の目ざましい進歩に伴い始まった薬学教育6年制も10年目を迎えました。この間、医学・薬学・看護学の専門職連携教育 (IPE: Inter Professional Education) は必須となり、本学は大阪医科大学とタッグを組み、日本の薬系大学のリーダーとして、さらに優秀な薬学人・薬剤師養成を目指しています。

2017
年頭所感

個性輝く私立大学の存在を示す年に

鎌田 薫 ● 本連盟会長、早稲田大学総長

2017年の年頭にあたり、日本私立大学連盟加盟大学のますますのご発展と、関係各位のご健勝ご多幸を心から祈念申し上げます。

ご存知の通り、平成27年度の私立大学等の経常的経費に対する補助割合が9・9%に陥り、私立学校振興助成法が成立した1975年以前の数値となってしまうました。助成法制定時の参議院文教委員会の附帯決議において「できるだけ速やかに2分の1とするよう努める」とされていたにもかかわらず、1980年度に29・5%をピークに、補助割合は減少の一途をたどり続けています。「教育条件の維持及び向上」、「学生等に係る修学上の経済的負担の軽減」、「私立学校経営の健全性の向上」という私学振興に向けた三つの目的を達成するため、先達の熱意と尽力により制定された私立学校振興助成法の精神がないがしろにされ、形骸化されている状態といわざるをえません。

私立大学はこれまで、わが国の歴史の大きな転換点で極めて大きな役割を果たしてきました。明治期の急速な近代化の実現は、それを支える多くの優れた市民・国民を私立学校が育てたことによるものであり、第二次世界大戦後の驚異的な早さによる復興、さらには高度経済成長も、私立大学が多くの有為の人材に高等教育を施し、全国くまなく分厚い中間層を形成したからであるといっても過言ではありません。また、人口急増期の高等教育進学率の上昇に対応したのも私立大学です。その結果、現在では、わが国の学部学生の

約8割が私学に在籍するに至っています。このように、私立大学は常に社会のニーズに応え、わが国の知的水準を幅広くかつ高度なものにしてまいりました。

しかしながら、国の高等教育に対する公財政支出の現状は、国際比較に基づいて見れば、全体として極めて低い水準であり、とりわけ学生1人当たりの公財政支出では国私間に約13倍という不合理な格差が存在しています。また、そもそも国立大学の授業料と私立大学の授業料との間に大きな差があり、これは、実質的には国立大学生に国がその差額相当額の給付奨学金を支払っていることにほかなりません。さらに、国立大学の学生の30%が授業料減免の対象になっているのに対し、私立大学は約2%に過ぎないなど、国立大学と私立大学との間には大きな格差が存在しています。ある高名な研究者は、「私立大学に対する公財政支出がもたらす経済的・社会的効果は、税増や社会福祉関係の支出削減など公財政にもたらす改善効果だけでも、公財政支出額の10倍に上る」と指摘しています。同じ公教育を担う大学の間にも、設置形態の違いによってこのように大きな格差が設けられていることには何の合理性もありません。

新しい時代を支える人材の育成という高等教育機関に託された社会的使命を遂行するために、私立大学は自助努力を重ねていますが、それらの努力もはや限界に達しています。より強固な公的支援を実現させるためには、われわれ私立大学自らが声を挙げ、私立大学の果たしている社会的な役割の重要性とそれを実現する上での公的支援の必要性について、広く社会の理解を得ていくことが不可欠です。

連盟では、今こそ、事業者団体としての役割を大いに発揮し、加盟大学の皆さまと危機意識を共有した上で、一体となって私立大学の新しい潮流を作り出す行動を積極的に展開していく所存です。私立大学における教育の質と量の充実を図り、さらにいっそう高度なものにしていくこと、私立大学等を基幹とした高等教育政策を実現することこそが、わが国をさらなる発展へと導く鍵を握っていると確信しております。

人間の教育としてのリベラルアーツ

山田 耕太 ● 敬和学園大学長

「人間の教育を受け持つ者」(『プロタゴラス』)

はじめに——リベラルアーツの源

大学は中世ヨーロッパの修道院のリベラルアーツ教育から誕生した。ところで、リベラルアーツとは何であり、どのように形成され、どう発展したのか。

ヨーロッパでは古代ギリシア・ローマ社会から中世のキリスト教社会を経て近世に至るまで、自由人の教育のために「リベラルアーツ」と呼ばれる「自由(学芸)七科」が教えられてきた。すなわち、「三科」と呼ばれる「文法学」「修辞学」「論理学」と、「四科」と呼ばれる「代数学」「幾何学」「天文学」「音楽(理論)」である。その源は、紀元前4世紀のアテネの黄金時代にソクラテス、プラトン、アリストテレスの3人が始めた私塾的な学校にさかのぼる。

ソクラテスはソクラテスの弟子でもあり、ゴルギアスの弟子でもあった。民主主義社会の指導者に欠かせない「演説」の方法を教える「修辞学校」を始めて、「修辞学」を教えた。

プラトンは師のソクラテス没後にピタゴラスの影響も受け、当時アテネの北西の郊外であった「アカデメイア」で学校を開いた。そこで教えたことは、プラトンの『対話篇』として残されている。プラトンの学校では、オルフェウスに由来するピタゴラスの学問の影響を受けて「代数学」「幾何学」「天文学」「音楽(理論)」を教えた。それらはまとめて「数学」と呼ばれた(後の「四科」)。これらを基礎として、上級の学問である「哲学」(ピタゴラスに由来する言葉)として「対話法」を教えた。

アリストテレスはプラトンの弟子であったが、師

の死後、当時アテネの東の郊外であった「リュケイオン」で学校を開いた。そこで教えたことは『アリストテレス全集』に残されている。アリストテレスはプラトンのイデアの世界を否定し、イデアの世界に導く「真理」ではないとプラトンが退けた「真理らしきもの」を根拠にする「修辞学」や「詩学」（悲劇・喜劇などの文学）も学問体系の中に含めた。すなわち、理論学である「数学」「自然学」「神学」、都市国家での実践学である「政治学」と「倫理学」、ドラマの制作術の『詩学』と演説の制作術の『弁論術』（修辞学）、さらにこれらの学問と技術の「道具の学」（方法論）としての「論理学」（弁証術）である。

1 リベラルアーツの形成

紀元前4世紀に、アレクサンダー大王が登場して都市国家を滅ぼし、圧倒的な軍事力を背景にした帝国が出現すると、ストア派、エピクロス派、懐疑派という折衷主義の哲学が広まった。とりわけ、ストア派では「言葉の学」（後の「三科」と呼ばれる「文法学」「修辞学」「論理学」を基礎に学んだ。

「三科」と「四科」の統合は、ソフィストのヒッピ

アスが「修辞学」の一部の「記憶術」と「四科」を結び合わせたことに起因する。アレクサンドリアのフィロンの著作を見ると、紀元前1世紀頃には「三科」と「四科」で構成された「自由七科」が既に形成されていたことが分かる。

「自由七科」は互いに繋がりが合った「一つの真理」の「多様な面」と考えられ、「円環的なバイディア」（エンキュクリオス・パイディア）とギリシア語で呼ばれていた。ローマのワットロやキケロは、それをラテン語で「フマニタース」（人間性）と訳した。

フィロンは、「自由七科」を「無教養」と「教養」の中間の「前教養」の段階に位置付けた。ユダヤ人のフィロンにとって、「教養」とは「哲学」そのものであったが、その内容は「旧約聖書」の哲学的な解釈、すなわち「神学」であった。フィロンに由来して、中世思想を支配する「哲学は神学の奴婢」というスコラ哲学の枠組みが形成されていった。

リベラルアーツ「自由七科」の「言葉の学」と称された文系「三科」と「数学」と称された理系「四科」は、現代流に表現し直せば、「コミュニケーション学」と「数学」に裏打ちされた「世界観学」、ある

いは「宇宙論」ということもできよう。

2 リベラルアーツと大学

12世紀ルネサンスにおいて、修道院のリベラルアーツ教育を土台にして専門教育の学部ができ、大学が誕生した。すなわち、アルプスの南側のポローニャでは法学部、サレルノでは医学部、アルプスの北側のパリでは神学部が創設されて大学が始まった。

中世の半ばを過ぎると、大学は「リベラルアーツ学部（後に哲学部と呼ばれる）」「法学部」「医学部」「神学部」の4学部体制になってヨーロッパ各地に広まり、中世末期までにその数は70を越えた。

リベラルアーツ「三科」の「文法学」の初級文法ではギリシア語やラテン語の文法を学び、上級文法はギリシア・ローマの哲学書、歴史書、文学書（抒情詩・叙事詩・悲劇・喜劇）を素材にして学んだ。そこから「哲学」「歴史」「文学」という「人文学」（フマニタース）の柱が分れていき、知性ととも感性が磨かれた。「修辞学」と「論理学」では議論の方法を身に付け、リベラルアーツの「四科」の「数学」では理性が培われ、合理的精神が養われた。

しかし、大学が発足するはるか以前、紀元前4世紀のヒポクラテスの時代から同業者間で医学の技術教育が行われ、紀元2世紀からアレクサンドリアをはじめとする各地では神学の実践教育が行われ、6世紀のユスティニアヌスの時代から東ローマ帝国ではローマ法の実務教育が行われていた。

大学は「普遍的な価値観」を養い、知性や感性や理性によって「人間性」を培う「リベラルアーツ教育」を土台にして、裁判官・医師・聖職者など国家が要請する専門職を育成するための「専門教育」を施すという点で、それ以前の「技術教育」「技能教育」とは時代を画している。

3 リベラルアーツの展開

宗教改革による信仰の再発見と強調によって、理性と信仰は遊離し、理性を土台にしたリベラルアーツと哲学、またその上に築かれた信仰による神学という中世のスコラ的枠組みが崩れていった。

ほぼ同時期に、コペルニクスやガリレオらによる天文学的発見によって、プトレマイオスの天文学は崩れ、天文学をはじめとした科学革命が起こり、科

学を擁護するデカルトの『方法序説』が登場した。

従来の「三科」と「四科」という領域は時代の変遷とともに「人文学」と「自然科学」へと拡大し、また拡散していった。しかし、その精神は残った。

フランシス・ベーコンは『学問の進歩』において、従来の人文学の方法論である演繹法に基づいて、「人間の知である学問」の「文学・歴史・哲学」と「神の啓示による学問」の「神学」を分けて述べた。また、新しい科学の方法論である帰納法については『ノヴム・オルガヌム（新機関）』で述べ、さらに、科学の研究を促す研究機関については最晩年の『ニュー・アトランティス』で構想した。それは、その三、四十年後に発足したイギリスの王立学士院やフランス学士院の設立を促した。

デカルトの科学的精神に基づく哲学に対して、一方では、パスカルが「原パンセ」ともいうべき『愛の情念について』と、それを展開させた『パンセ』において、科学的精神の「幾何学的精神」に対して人文学的精神でもある「繊細な精神」を立てて、両者が必要であることを述べた。他方、「歴史哲学の父」ヴィーコは『学問の方法』で、科学的精神の「新

しいクリティカ」に対して、修辞学に基づく人文学的精神の「古いクリティカ」の復権を主張した。

18世紀の啓蒙時代に哲学部の教授であったカントは、最後の著作『諸学部の争い』の中で、上級学部は哲学部、法学部、医学部に対して、下級学部の哲学部の立場を擁護し、神学・法学・医学という実用的な学問に対して、国家の要請から自由で理性に基づいて根源的なテーマを論じる哲学の復権を訴えた。

さらに、米国の独立やフランス革命などによって市民社会が成立すると、自然科学の方法論を準用して社会を分析しようとする「社会科学」が興ってきただ。その先駆はアダム・スミスの『経済学』である。「経済学の父」アダム・スミスは、出発点で「修辞学講義」「法学講義」「哲学史」を論じ、道徳哲学で『道徳感情論』と『国富論』を論じて出版した。それは、アリストテレスの学問の枠組みを自然神学・自然倫理学・自然法学に書き改め、アリストテレスの弟子による偽書であった「家政学」（すなわち「経済学」）を新たな視点と方法論で書き改めたものである。

4 リベラルアーツと科学

産業革命の19世紀に入ると、中世以来の大学の教育機能（人間教育と専門職教育）に研究機能が加わった。それは大きく次の二類型に分かれる。

第一に、ファイヒテ、シュテフェンス、フンボルト、シュライエルマツハーの大学の理念に基づいて、科学的探究を主眼として創立されたベルリン大学の類型である。ここでは研究と教育は一致し、融合すると考えられていた。この大学の理念は、ヤスパースの『大学の理念』に継承され、現代ではガダマーの『大学の理念』に受け継がれている。

第二に、これとは対照的に、英国のニューマンが学長就任と前後して「リベラルアーツ」による人間教育（一九世紀の表現では「紳士教育」）を目的にした『大学の理念』を語り、出版した。この大学の理念は、スペインのオルテガの『大学の使命』に継承された。そこでは「リベラルアーツ教育」を根幹に据え、その外側に専門職の「専門教育」、さらにその外側に研究所と連携した科学的探究を置いた。現代ではペリカンの『大学とは何か』に継承されている。

米国では、この欧州の二類型は基本的にリベラルアーツ教育による学部教育と科学的探究による大学

院教育という二重構造に分かれて受け継がれた。日本では、戦前は欧州型（旧制高校／私大・第二類型、旧帝大・第一類型）の影響を受け、戦後はその影響が米国情型に変貌している。

5 20世紀のリベラルアーツ論

20世紀にはさまざまなリベラルアーツ論が出現したが、その代表的なものはハッチンズとロソフスキの「リベラルアーツ論」である。

ハッチンズは20世紀前半に30代の若さでシカゴ大学の学長に就任した。しかし、自分の無教養を恥じて、学長職の忙しい合間を縫って古代から現代に至るさまざまなジャンルの古典を読んだ。その経験から、10年かけて180冊の西洋の古典を読む「グレートブックス」というブックリストを作成し、シカゴ大学で実践した（『偉大なる会話』）。

この手法は、現在の日本の大学でも文学史や思想史などの講義に取り入れられている。また、同僚のアドラーと共に、経済界の指導者の研修に「グレートブックス」を取り入れて、それを実践する場としてアスペン研究所を開設した。学長退職後は『ブリ

タニカ百科事典』の編纂と生涯教育に力を注いだ。

ハッチンズが過去にさかのぼって偉大な魂と対話したのに対して、ロソフスキーは未来へと向かう。

ロソフスキーは日本や東アジアの経済史家で、ハーバード大学文理学院の学長時代に、コア・カリキュラム作成の前段階として、大学教育を受けた教養人の基準に次の5点を挙げている（『大学の未来へ』）。

- ① 明瞭かつ効果的に考えて書く。
- ② 宇宙や社会や人間の知識を批判的に考える。
- ③ 異なる文化や価値観を受け入れることがで
きる。
- ④ 倫理的な問題への理解や判断基準を持つ。
- ⑤ 一つの分野について、深く探究する。

これは本学もそうであるが、大学のカリキュラムポリシーや、その前提となる「大学教育を受けた人間像」が準拠しているものである。文部科学省の最近の「学士力」や「学力の三要素」も、さかのほればこのような人間像が前提になっていると思われる。

おわりに——実践するリベラルアーツ

20世紀後半からの情報革命による情報社会の中で、

大学教育も大きく変貌しつつある。一方ではグローバルゼーションが、他方ではローカリゼーションが同時に進行し、また地域間格差が大きくなり、地方創生策や地域再生策が採られつつある。

現代の大学には、教育・研究機能の他に社会貢献機能と組織としての管理運営機能が求められ、それらがますます大きくなりつつある。同時に、社会貢献は地域貢献の色彩を強め、管理運営では経営的視点を強化せざるを得ない状況になっている。

日本の大学も、18歳人口の50%以上が大学に進学する「ユニバーサル段階」に入り、教育機能も大きく脱皮しつつある。大学教育は教育過程の最終段階から生涯学習の初期段階へと位置づけ直し、「教育の主体は教員」から「学習の主体は学生」へと転換する。問題発見と解決の方法論を身に付け、大学での学びと地域社会での学びをフィードバックさせて学ぶ時代に入ってきた。こうして、「リベラルアーツ」は「実践するリベラルアーツ」へと変貌する。だが、中世以来のモットー「真理はあなたがたを自由にする」（ヨハネ福音書8・32）に変わりはない。